

3.3. 南極大陸はウィーンより暖かかった

# 「南極大陸はウィーンより暖かかった」

2000年12月11日(月)～12月20日(水)



天候：概ね曇り、気温零度前後

最南上陸地点：64度53分(12月16日)

最南到達地点：65度50分(12月17日)

航行距離：1816海里(3363km)

3.3. 南極大陸はウィーンより暖かかった(2000年12月)

\* 出発まで

二〇〇〇年最後の公務出張はアルゼンチンでの会議だった。初の南米訪問で公務後の楽しみに何を計画しようかと考えた。現地の十二月は夏である。最初に考えたのは例によって趣味の「山」だった。アコンカグアである。「南半球最高峰六九六〇<sub>〇</sub>」に魅かれた。この年の夏は、やたらに山に惹かれていた。北と南からの二度にわたるモンテローザを含め、あたかもおびき寄せられるように山行計画をたてていた。アコンカグアについても山岳協会でも資料を調べ、登頂経験者に話も聞いた。申し込み寸前までいったが、現地のガイドからの情報で、十日間を越えるこの高度への登山に耐える体力の自信は持てなかった。二度目のモンテローザ山行の辛さを思い起こすと、20kg 近くになりそうな荷をこの高度まで担ぎ上げる自信はなかった。結局断念した。代わりに浮上したのが南極大陸への船旅だった。

インターネットで情報を集めた。情報はすべて英国発で、乗る船はどれもロシア船籍の氷砕船だった。いろんな旅行会社が、パッケージ旅行を売り出しているということらしく飛行機での旅行と仕組みは同じらしい。長期クルーズもあったが私は一番短い十日間にした。南半球の夏とはいっても南極は寒いに違いない、高度の問題はないとしても気温の点ではアコンカグアよりも厳しいかも知れない、山の道具がかなり使えるだろうが充分だろうか、と期待・好奇心・不安が同居していた。ところが旅行会社から届いた資料によると意外に暖かいらしい。-10℃以下になることは珍しいという。

かなりの寒冷地への旅行のイメージだったので多少は「なあーんだ」という気持ちと、これなら心配はないとの安心感が共存した。これならウィーンの冬と大差はない。この寒さなら、持ちあわせの山の道具がすべて使えるはずである。装備に不安はなかった。が、靴だけは違った。上陸に際しては本船から小型の船で岸に近づき、水際を歩く必要から長靴が必要だった。幸い家主の主人が立派なものを貸してくれた。本船の中はTシャツでも良いくらい暖かいらしい。南極大陸に上陸するための数時間のためではあるが、防寒具を一杯詰め込んで出発した。

行き先は多くの聞き手に一種の驚きと羨望を呼び起こした。山の登頂記同様、旅行記を期待する声を耳にした。船旅が好きだと言った友を思い出していた。自分自身は退屈そうな船旅への関心は強くはなかったが、二度と行けそうにない南極大陸の名とこの友との船旅なら楽しそうだとの空想が夢を高めた。

旅行会社から送られてきた資料の中に南極大陸の地図もあった。地球を下から、つまり南極上空から見たもので、日頃見慣れた地図とは異なる。上下左右が北南西東になっていない。南極の地図は全方向が北になる。概ね円形に近い大陸の一部に子猫の尻尾のような半島がある。案内書と対比してみると、この半島が人の住む地、アルゼンチン南端からもっとも近いらしい。船は片道二日あまりでこの地域に到達し、天候状態を見て数ヶ所で上陸するとある。ペンギン他の野生動物に会えるらしい。



「南極圏」は南緯 66° 33'以南を指す。夏至に白夜、冬至に陽を見ない緯度だそうだ。訪ねる南極半島はこの緯度を跨いでいる。近辺には小さな島が点在していて、これらのいくつかにも上陸するようだ。各

国の観測基地も点在している。日本の昭和基地はこの半島から東へ直線で約四〇〇〇kmの地点にある。

公務が終わって十二月十日ブエノスアイレスからアルゼンチン最南端「世界の果ての街」ウシュアシアに飛んだ。その昔、喜望峰に辿り着いたマゼランの一行が原住民の焚く松明の火を夜目に見て「火の大陸」と呼んだ島嶼群にあり、南緯 54° 50'、北半球なら樺太北端に相当する。モスコアよりやや南である。その位置から厳しい環境を予想していたが、夏のせいか思ったよりずっとマイルドだ。気温 14 度。日差しもやさしい。周囲は海と山。海拔 1000 位もあるかどうか。が、雪を冠っている。夕方五時すぎ着地。夏至に近いから日が長い。夜十時過ぎ迄は灯なしで字が書ける。

#### \* 乗船、出帆

十二月十一日（月）

朝食前、遊歩道を聞いて小散歩に出る。ホテルは街とは離れた「景勝」の海沿い。すでに陽は高い。海鳥が飛び交い、これからの十日間の船旅を想像する。アルゼンチン南部のパタゴニア地方にも氷河はあるし、あざらしやペンギン等の極地動物はかなりいるらしい。今から訪れる南極大陸はさらにエキサイティングだろうと胸が躍る。朝食後、荷を預けて街へ出る。街を歩く多くの旅行客は南極へ行くのか。港に出て乗船の船を確認。港の最先端に黒い船体が投錨している。あれが乗船の Dranitsyn 号だ。



Ushuaia 港に停泊中の Dranitsyn 号, 10000 トン

乗船四時。幸い個室。窓は小さい。六時出帆。同時に船内設備や日程の全体説明に続いて安全訓練。総勢約 60 名。我々のグループだけらしい。意外に老人が多い。日本人は四名。八時、ウェルカムパーティと夕食。ガイドに聞くと、クルーズは南緯 66° 33' の「南極圏」内には入らないという。「白夜」を楽しみにしていただけに少々落胆する。

十二月十二日(火)

船の揺れで目覚める。三時。窓の外はもうかなりの明るさ。が、日差しはない。曇り。陸影も当然ない。ひたすら走っている。もう一眠りして五時半起きだす。二日間は「走るのみ」なので、船内の図書室で大陸探険や科学調査の歴史を調べたり、甲板から海を眺めたり、最上階の運転室を訪ねたりしてのんびり過ごす。その空き時間に旅行に関する講義が続く。食物連鎖。鳥。雪と氷。ドレーク海峡。

昼過ぎ船内放送。『急病人発生、全速でウシュアシアに引き返す。今後の予定は時刻相談。』今朝 9 時に転倒、ヒップ骨折。肺炎懸念。24 時間内に医者に届ける要。この波ではヘリ装備が使えぬ由。

午後九時半。『波の静かなビーグル海峡で病人を救急ヘリに移送完了、再び南下する。』

急病人騒ぎで乱れたが、船内生活のパターンが見えた：0600 早起き鳥 Coffee, 0800 朝食, 0900 午前プログラム（上陸または講義）, 1230 ランチ, 1400 午後プログラム, 1900 今日の総括 & 明日の予定, 1930 夕食, 2100 映画。食事は思ったより美味しそう。野菜も朝の好物ヨーグルトもある。

十二月十三日(水)

揺れで目覚める。五時。窓の外は曇り。再南下からまもなく十時間、昨日より南下している。ひたすら走っている。波間に小さいながら白波。窓外を飛沫が飛ぶ。波も高くなってきた。昨日より揺れは大きい。波の高いドレーク海峡に入っている。外気4度。一万トンの船でこの揺れ、初期の探検家は小さな船でどんな揺れに耐えたのか想像を絶する。

船内の蔵書で文献調査を続ける。トーストマスターズの次の主題は「歴史を語る」。旅行記では駄目なので「探検家スコット」に焦点を合わせる。子供の頃、彼の伝記に感動したことを思い出す。アムンゼンに南極点一番乗りで負けたこと、帰途に五人全員が遭難死したことなどを思い出す。彼の探検目的は「科学調査」が第一だったこと、荷物搬送にロバを用いたことが犬橇主体のアムンゼンに負けた一因であることなど新しいことも知った。合間の講義：地質。探検家。鯨。ペンギン。

午後六時。『明朝島到着、午後上陸に備え待機せよ』と放送。南緯 66° 33'以南の「南極圏」は夏に白夜を迎える天文学的な地域線なのに対して、「南極コンバージェンス」は生態的により意味のある地域線（帯）である。南極からの冷海水が北からの温海水の下に潜り込んで海表面の温度分布に段差が生じ、そこに棲息する動物の種類に大きな違いが見られると言う。夏である今、この線は北に移動し、今日南緯 60°でほぼ横断したという。生態学的には「南極圏」に入ったことになる。

#### \*いよいよ南極大陸へ

十二月十四日(木)

四時前起床。晴れ。波静か。今日は Amundsen 極点到達 (1911 年) 記念日。くしくもこちらは初の上陸。長い日になると気持ちが高揚する。Bridge (制御室) へ急行するが、まだ島影も冰山も見えず。

五時すぎ、右前方に島影が見えてくる。King George 島の山 (1850 ㍎) だと言う。

六時の食堂、Earlybird Coffee。中年婦人が「海鳥が見えるのか」と眼を輝かせて食堂に飛び込んで来た。「予定表に Earlybird プログラムがあると書いてあった」と居合わせたスタッフに迫る。微笑ましい誤解。言葉の間違いは日本人だけではないと安心する。言葉の面白さを感じずる。



漂流する冰山

朝食時、冰山に近づいて周回航行。でかい。十階相当のこの船も見劣する。冰山は陸上の氷河が自重で下流に押し出され、海岸で崩壊した破片が漂流している物。山型や平らな長屋型など自然の造形美に富んでいる。大きい物は海底に座礁しているが、中小型は何年も漂流していると言う。冰山にも年輪があることを知る。周回中に鯨が接近、数頭が出迎えてくれた。多くの乗客が甲板でウォッチング。1100 頃投錨。Ushuaia 出航から 6 5 時間経っている。

昼食後、最初の島 Penguin 島(南緯 62° 06',西経 57° 56')に上陸。上陸用のゴムボートに乗り換えて海岸へ。長靴が下船時に役立つ。外気零度で寒くはない。水温も案外暖かい。氷の塊かと思った南極だが、海岸近くの土面は露出し、湿原に近い苔類も見える。「案外、緑っぽいな」が第一印象。多くのペンギンが

出迎える。あざらしも数頭寝そべっている。日光浴か。海岸には不自然に大型の骨が散在している。その昔の捕鯨時代の名残とガイドが説明する。海鳥が飛び交う。

あざらし：哺乳類。今日のは象あざらしで体長約2m。体を寄せ合って多少警戒心を抱いている様子。

海鳥：何種類かいる。多いのはあほう鳥と Scua。この Scua はペンギンの周辺でその卵を狙っている。



Penguin 島の Chinstrap ペンギン

ペンギン：鳥類だが飛べない。泳いで海中から餌を採る。今が繁殖期。通常二卵だが、育つのは大きい二つ目だけ。鶏卵よりやや大きい。3-4年を生き延びると20-30年、種類によっては50年も。雄は海岸に巣を作って雌を待つ。雌は立派な巣を選ぶ。背黒腹白の体が保護色効果を持ち、海に浮かんで身を隠す。今日見た三種はどれも小型の Adelie, Gentoo, Chinstrap。身長は皆約50cmで目の周辺の特徴で識別できる。南極に生息するのは17種ペンギン中の7種。最大の皇帝ペンギンは夏の南極には居ない由。

夕食は「初上陸」の感激と印象交換で大変な賑やかさである。明日も上陸計画が続くと全員が興奮気味である。乗客の中に三人パーティのスペイン人がいた。南極大陸上の未踏峰を目指すと言う。「初登頂者にはその山に命名する権利があり、その名前は自分の生まれ育った村の名に因んだ名前に決めている」と誇らしげである。今回の山は高さ1500mだが Matterhorn 並みの難度「らしい」。総重量約200kgをかっさげ、十日間で計画完了、このクルーズ船の次回の帰港時に拾って貰うという。

十二月十五日(金)

五時。曇り。窓外に雪を冠る島。三階上の運転室へ登ると、右に島、左に大陸半島が見える。ついに来た。しばし見入る。外気-2℃、風速7m/s。進路に氷塊が増える。が、砕氷船だから心配はない。南緯64°が近づく。この緯度になるとさすがに朝が早い。日本はもう夕方だなと一瞬心に浮かぶ。

午前、Cuverville 島(南緯 64° 41')上陸。無風。Gentoo ペンギン。海沿いに屈んでいると興味深そうに寄ってくる。水中にこんぶ様の海藻を拾う。「醤油で食えるかな」と考える。ボートで沖の冰山を周回する。冰山となる塊を削り取られた氷河の断面を間近に見る。荒々しく氷の絶壁がそそり立っている。海面の小船から見上げると高層ビル並だ。こんな怪物に衝突すればタイタニックもたまらなかつただろう。氷の結晶で光線が屈折して生ずる青が神秘的だ。本船に戻り、靴を洗って船室に戻る。南極の生態系に異質の微生物類を持ち込まないようにと上陸前後の水洗指示が厳しい。



冰山となる塊を削り取られた氷河の断面

午後いよいよ大陸に上陸。昼食の間に船は湾内を南下し南極半島 Neko 港(南緯 64° 51')に移動する。南

極大陸は概ね円形に近いが、ポニーテールのように延びて「南極圏」から北へ突き出ているのがこの半島。Neko 港は西岸にある。大陸との間をつなぐボートの途中で Killer Whale の群れに会う。頭か尾か、黒いものが水面上にちらっと見えた。と私には思えた。ガイドがすかさず、「Killer Whale の家族連れ、おそらく四頭」と言う。数隻のボート間で携帯が働き、鯨を探し回る。乗客も四方に眼をこらして水面上に顔を出すであろう黒いものを探す。が、水面は静かなまま。再び潜った鯨は何処へ行ったか。ガイド達にはどうして分ったのか、約20分後、待機するボートの近くで数頭が体を現した。体長5m程度か。子鯨は小ぶりだ。一、二分で再び潜水。もう姿を見ることはできなかった。



大陸 Neko 港と Gentoo ペンギン

Neko 港に接岸する。海岸に Gentoo ペンギンの群生地がひろがる。ガイドの許しを得て雪面を小高い丘の中腹まで登る。小春日和の様な陽気だ。視線を下に向けて見る海、冰山も良い。小休止の後、海岸に出て、泳ぐペンギンを観察する。飛ぶように水面をジャンプして呼吸する。また潜る。早いものだと感心する。「あの小さい体で数分間も潜水できるなんて、どんな肺活量なのか」と質問する。「知らない、あんたは面白い質問する人だね」とガイド。人間とは酸素摂取機構が違うのだそうだ。

夕食「Antarctica」印のビール。南極製ではないが、現地限定販売銘柄だろう。気のせいかうまい。陽気なアメリカ娘が土産にと空缶を持ち帰った。明日は午後に訪ねる英国基地から「現地発」の絵はがきが投函できると聞いて、多くの乗客が書いている。私も数通の下書きをする。

十二月十六日(土)

三時過ぎ「あまりの静けさ」で目覚める。連日「揺れ」で目覚めていたから「あまりの静けさ」に逆に不安になる。顔が雪焼けしている。制御室へ上がり、海図に作業中の若い乗員に尋ねると、「まだ Neko 港でドリフト中」と言う。「何か問題なのか」「何もない、今から出発」。外気3度。小雪。

九時。アルゼンチンの Almirante Brown 基地に上陸。小さな栈橋のすぐ上に「極点まで2800km」の標識が建つ。この基地にも土産物店があるとの情報だったが数棟の建物は皆閉まっている。この規模なら十人程度の越冬隊か。十人で半年の越冬生活はどんなものかと想像する。今日は先ず裏山(70m)に登山。雪山の感触を楽しむ。わずかな距離だが雪道を登ると汗ばむほどだ。見下ろすパラダイス湾は無機質の美しさだ。海が黒い。



Almirante Brown 基地から望むパラダイス湾

そのあとのボートツアーで氷河滑落直後直前の造形美を満喫する。崩れ落ちた後に残された氷河の断面には大きなクレバスが横顔を見せている。これに気付かずに氷上を駆けて来て横断しようとしたスコット隊の犬橇隊は先頭から次々とクレバスの中に飛び込み、ロープにぶら下がった犬を死なせ、輸送力を失ったのがスコット遭難の一因だったと本に書いてあった。氷河の流下速度は毎年300mと言う。



氷河断面に見えるクレバス、上部の幅約5m

昼前本船帰還のころから雪風強まる。登山のスペイン人パーティはここで下船。成功を祈った。

午後 Port Lockroy の英国基地訪問は荒波と雪混じり強風 (27m/s) で上陸中止と決定。乗客の間にため息が流れる。職場や親しい友人宛での南極現地発カードを準備したが無為になった。旅券に期待した「南極大陸訪問」のスタンプも実現しなかった。

午後七時。『天候回復見込み薄。さらなる上陸断念し、南極圏 66° 33' 到達に向け南下する。砕氷航行もあり得る。 Ushuaia まで三日余り外洋航行が続く。荒波覚悟。船酔い対策要。』と明日の予定。結局上陸は四度。期待したほど野生動物に会えたのか。が、南極圏到達も記念、と気持ちを入れ替える。他の乗客も同じ思いのようだ。

十二月十七日(日)

深夜「揺れ」で目覚める。外洋に出たのだ。寝ておれない。検診時のバリウム台を思い出す。そのベッドが不規則に予告なしに動いているようだ。体が上下にベッドの上で移動する。外は明るい。

四時。うとうとしたが起きて Bridge へ上がる。水平線を基準に横揺れを目測すると 30° は越えている。雪風は小康状態だが波が高い。ビデオに「横揺れ」を撮る。最大傾斜 42° と後刻知る。あと南極圏まで約 1400km、7 時間程度か。

八時。荒波で朝食が出せない。波の静かな島近くに一時接近を試みる。外気一度。

九時。『天候さらに悪化の見通し、計画打ち切り Ushuaia へ直行する』と放送。ため息。最南点は南緯 65° 50'、アイスランド北端に相当することを地図で確認。南極圏まで 40' 余り、距離にして約 700 km だが、すでに舳先は北を向いている。南極圏到達もなくプログラム完了。結局上陸は島二度、大陸二度。さらに期待が続いていただけに、突然の「北上開始、Ushuaia へ直行」に失望感隠せず。

が、得たものは少なくない。探検の歴史に新しい事実を知った、山とは違う自然の美しさも見た、食物連鎖など南氷洋の生態系についても学んだ。南極の自然を守り、人類共有の財産として維持しようとする「南極条約」の目指す目標も知った。そして個人的には「北」にも興味が湧いてきた。「南」は遠いけど、「北」ならより近い。日本からでもかなりのところまで行けるのではないか。ヨーロッパからなら北緯 80° のスピッツベルゲン島までは行けるかも知れない。そこにも新しい世界があるだろう。ますます好奇心がエネルギーを与えてくれそうだ。

## \*帰路へ

十二月十八日(月)

波高いドレーク海峡をひたすら北上。「揺れ」で難しいもの：体操、睡眠、シャワー、書き物。帰ってからの「記録」の準備に時間を割く。旅行記、トーストマスターズ原稿。旅行記はやはり日英独の三編を書くのだろう。ウィーンに帰ったら忙しいぞ。「南極大陸上陸証明書」が交付される。

十二月十九日(火)

久しぶりに碧い空と青い海。南の海は黒かった。午後三時、喜望峰に接近、右に見て太平洋へ出る。反転して再び大西洋へ戻り、Ushuaiaへ直行する。

十二月二十日(水)

四時、Ushuaia 着岸。久しぶりに「揺れない」甲板で体操。見下ろすと、船上と栈橋上でロープ懸けに忙しく働いている。未明の闇に橙色の街の灯かりが美しい。

八時、下船開始。終わった。無事帰って来た。「こんなに遠くまで来られたのも国連勤務のおかげのレジャー、しかしこの規模はこれが最後、良い思い出の世紀末になった」と感慨にふける。

帰路は明日の便。今日は余韻を楽しむだけと、昼は街の裏山に登る。スーパーで仕入れたビールとつまみで、暑くはない夏の陽射しの中で海を見下ろしてピクニック。犬を連れて近所の子供たちが「オーラ！」と近づいてくる。この十日間の印象、友に上手く伝えられるだろうか。

夜八時、在住二十年の上野さん宅で立派な「たらばがに」を賞味する。旅行中に知り合った JICA の木村夫妻、群馬の石川青年の紹介である。うまかった。一匹二kgもあるという。姿形にも、味にも「日本」を思い出し、一人で食するのは勿体無いなと何人かの顔を思い浮かべた。これはアルゼンチンの味でもなく、ウシュアイアの味でもなく、日本の味であり、上野さんの味だと思った。またいつか来たいけど、どうなるか。

十二月二十一日(木)

帰国の日 Ushuaia の朝、珍しく私に詩心が湧いた。「こんな朝日を一緒に見たい」



十二月二十二日(木)

24時間かけて戻ったウィーンは南極大陸より寒かった。-5℃。風が耳を切るように冷たい。

その他の写真は英語版（ファイル名<E05AntarcticFoto>）に収録してある。

## 「こんな朝日を一緒に見たい」

窓の外のほの明るさに目が覚める

朝の五時

対岸の山の稜線に橙色の空が始まろうとしている

朝日が今にも顔を出しそうだ

涼気の中で味わいたい

顔も洗わず素手で飛び出す

冷気に広がる海岸砂浜、黒い海面

海鳥だけが砂浜を歩く、浜沿いを泳ぐ

キーッ↑ キーッ↑ グワッ↓ グワッ↓

寄せては帰す波音が伴奏する

ザーッ↓ サササ↓ ザーッ↓ サササ↓

稜線から橙色の太陽が顔を出す

水面に映る橙色の線が海をふたつに分断する

黒い水面をその橙色の線が自分に向かって走る

光線が強調するのか、押し寄せる波面が大きく見える

空を横切る海鳥二羽

雁か、いや群れではないからアルバトロスか

逆光の中で黒いシルエットが空を飛ぶ

波打ち際の砂利浜を歩く

口に自然に出てくる「北緯五十度」

三度繰り返す

朝日が稜線を離れていく

海を分ける橙色の線が次第に太くなる

丸い橙色の太陽

朝日が高くなっていく

一旦小さくなった太陽が大きく眩しく直視できなくなる

水面の橙色の線が次第に細くなり

やがて大きな太陽が海に映るだけとなる

体が冷えてくる

ホテルに戻る自分の影が長い

こんな朝日を一緒に見たい